

## 山森先生を偲ぶ会によせて

高村奉樹

### 社会科の授業のこと：

私たちが高津高校に入学した昭和25年（1950年）頃の時代背景、そのなかでの山森先生の思い出は、山岳部旧友の藤本勇、村尾行一（親しみこめて敬称略）が、それぞれ追悼文や、先生ご夫妻にずいぶんお世話になった感謝の文中にすでに記してくれた。よみがえる思い出のほかにはじめて知ったことも多い。先生が授業中、生徒にどのように向き合われたかを一年G組同級の藤本が書き、それを裏付ける愉快なはなしを村尾が加えているが、私には記憶がなかった。いつも語りかけるように授業を進められた雰囲気はよく覚えている。ある授業時間中、学徒兵として赴かれた中国大陸最前線の敵味方の布陣の様子を、軍事表記法で黒板に書かれたことがあった。詳しい内容は忘れたがそのときの話の落ちは、先生が騎乗警備にあたっていたときに突如敵の銃声がひびき、びっくり仰天してあやうく落馬しそうになった！ なお社会科の授業内容そのものにもあまり興味がなかった私は、いちど試験の答案に I am disappointed ! と朱書されて、しよげたことを覚えている。

### 山岳部のこと：

高津に入学した1950年、すぐに入った山岳部は、顧問秋山先生の先導で五月には、近江長岡から伊吹山にのぼり、帰途は菜の花畑のなかを歩いた。七月は北アルプスの烏帽子岳から西鎌尾根辿って槍ヶ岳まで小屋泊まりで縦走した。この機会に正門前の高津宮跡碑まえの山岳部員の集合写真をご覧にいたい。最後列右は部長の三年生野木さん（同期の靖夫君兄上）、前列には右端に野田、ザ

イルを担ぐ民谷、左端には長谷川君らがいる。二列目は右端の私のほかは上級生、ほかに数人の清水谷や夕陽？の制服姿の女性上級生部員が並んでいるが、残念ながら彼女たちと山に行った記憶はない。(写真 1)



この頃はその後、山森先生が山岳部顧問を引き受けられることはおもいもよらなかつた。卒業アルバムに残る木村、野田、村尾、奥西君たちに囲まれる社研部顧問が、当時の先生のイメージにふさわしい。(写真 2)

ときにはだれかが熱心に先生と議論することはあったが、とくに何か社会科学のテキストを読んだ記憶はない。山岳部は当初は秋山先生を顧問として活動したが、二年生の夏山では白馬岳から針木峠までのながい縦走に、途中下山の秋山先生のあと加藤先生が私たち部員にずっと付き合ってくださいました。三年生のときも入試勉強は忘れ、加藤先生とともに藤本たちと、常念岳から槍・穂高の縦走をした。常念岳の尾根でハイマツの傍らでシートを被って夜空をみながらすごし、槍の小屋でも自炊泊まりをしがあと、穂高の岩尾根歩きを西穂高まで楽しんだ。



(写真 3)

### 山森先生と私の山行：

さて私が山森先生と山で行動をともにしたのは卒業後8年を経た1961年春の鋸岳、立山合宿のときだった。この年、大阪市大山岳部の登山隊はネパールのランタン・リルンの初登頂を目指して貨客船サードハナ号で神戸港を出発した。この遠征に隊員として参加する藤本から、春山合宿で山森顧問をサポートするようにと頼まれ、58年のチョコリザ遠征のあと、京都でイネの実験を続けていた私は久しぶりに高校の現役諸君と春山に向かった。立山の弥陀ヶ原はスキーをはいて雪上車に引かれ、吹雪のなかの弘法小屋に一日閉じ込められてから、雷

鳥沢のテントで山森先生たちに合流した。まず最初の作業は、春の雪崩がもし起こった場合にも安全な場所にテントを移動することだった。このときの山岳部現役のなかには磯貝姉妹がいて快活に行動していたが姉の光子さんは藤本夫人である。二班にわかれて女性部員たちは立山往復、もう一班の山森先生と私は上級生男子部員とともに雪深い雷鳥沢をスキーつけて上がり、釧御前の小屋で一泊、アイゼン着けてザイルに繋がり尾根通しに釧頂上まで往復した。私にとっては二度目の春の釧岳だったが、先生や現役諸君の登攀技術は、積雪期の八ヶ岳などですでに経験を重ねてよくトレーニングされていた。そのとき雪の稜線で憩われる先生の画像が先日の追悼会で上映されたので、追悼会世話役の高野隆夫兄（高津17期）の好意でここに紹介する。（写真 4. 以下も同じ）



右横にいるのは間違いなく私で、先生に山へ同行した唯一の記録写真です。

この年は、おもいがけず私も京大学士山岳会のカラコラム登山許可を取るため、6月に西パキスタンに派遣された。半年ちかく粘って、最後は池田総理の初めて

の東南アジア親善訪問をカラチで待ち、日本パキスタン合同サルトロカンリ登山の許可を得て、翌年は遠征隊に参加しました。その後はフィリピンの研究所に長期滞在したり、自分のことで精一杯、帰国した1966年に比良に高津の山小屋ができたのは、当時の現役諸君の大変な熱意と藤本、村尾の協力、そして山森先生もこれを支えられたことによるのは明らかです。

私はフィリピンから帰国した夏、いちどだけ小屋材の荷揚げを手伝ったが、そのしんどさは、すでに藤本が書いた通りである。建設後はいくども小屋に通ったが、藤本など小屋の主として滞在した日数は数え切れないだろう。だが肝心の世話役村尾が、いちども小屋に行ったことがないとは、今回はじめて知った。

#### 追悼の献歌：

追悼会の席上、私は配られていた大阪高校の全寮歌をエールとともに声はり上げて、みなさんと“献歌”した。この歌はかつて授業のとき、先生が遠いところを見る目で出だしのところを口ずさまれたようにおもいますが幻視かもしれません。このたび旧制高校寮歌祭の世話役をした大阪高校文甲卒の長兄に、あらためて名簿を調べてもらったところ、返事がとどきました。

「山森さんは第18回文乙出身で五期先輩だが、きびしい時代で戦死者も何人かおられます。「全寮歌」はよい饞になって先生も喜ばれたことと思います」先生の遺影の前でこの歌を叫ぶうちに胸が熱くなった。この歌も三高の「紅もゆる」などと同様に、夢と高い理想に燃えた、あの青春の日々を思い出させます。最後のHoch Lebe! はドイツ語の万歳!、しかし私は永遠の生を! のおもいをこめて先生へのエールにしました。最後の写真はハイマツに憩われる先生です。(写真 5.)





こころより山森先生のご冥福とご遺族のご平安をお祈りいたします。

大阪高等学校 全寮歌：（註：大阪大学で歌い継がれたと思います）

東天紅を染むる金剛の峯にこれを嘯かば

天下の惰眠一時に破れ、

夕陽沈む茅渟（ちぬ）の海にこれを叫ば

魑魅魍魎も影を潜めん。

1. 嗚呼（ああ）黎明（れいめい）は近づけり

嗚呼黎明は近づけり

起てよ我が友自由の子

帝陵（ていりょう）山下（さんが）の熱血児

侃諤（かんがく）の弁地をはらひ

哲人の声消えんとす

6. 紫匂ふローレルの

葉蔭に宿りし美鳥（うまどり）が

一度（ひとたび）目覚めて羽搏（はばた）かば  
彼の大空（たいくう）に雄姿あり  
友よ溢るゝ若き日の  
希望の果てをいざや見ん

ハイザ大高 ハイザ大高 レーベ ホッホ ！